

## 最近 10 年間の考古学的調査の進展：南レヴァントの場合

杉本 智俊

The Advancement of Archaeological Research in the Southern Levant over the last Ten Years

Tomotoshi SUGIMOTO

キーワード：南レヴァント、ダビデの町、シロアムの池、メギドの礼拝堂

Key-words: Southern Levant, City of David, Pool of Siloam, the Megiddo prayer hall

南レヴァントは聖書の背景となった地として知られており、観光行政ともあいまって積極的な発掘調査が行われている。特にイスラエルでは、1948年の建国以来マサダ(Masada)やハツォル(Hazor)など大規模な発掘調査が積極的に行われ<sup>1)</sup>、ヘブル大学やテル・アビブ大学の考古学研究所が設立され、現在でも活発な活動が行われている。西欧各国はそれぞれの研究所を構えて長期プロジェクトを運営しており<sup>2)</sup>、日本隊も調査に加わっている<sup>3)</sup>。政府考古局はこれらの調査を運営支援する他、国内の全地域を体系的に踏査し、遺跡分布地図を作成しており、それに従って各プロジェクトを統制している。調査結果は、最終報告が単行本として出版される他、初期報告が *Israel Exploration Journal*, *Atiqot* 等の学術雑誌に掲載されている。

個々の調査はそれぞれ固有の意義を持ち、情報を蓄積する上で重要だと思われるが、そのすべてにまんべんなく触れることはここでは難しい。そこで本論ではここ 10 年間の調査の内、現在の南レヴァント考古学の方向性を典型的に反映する 2 つの分野 4 つの調査について紹介し、その意義を論じたい。

## 「ダビデの町」の調査

ひとつめは、エルサレム「ダビデの町」の発掘調査である。「ダビデの町」は現在のエルサレム旧市街の南に位置する小さな丘で、エルサレムで最初に居住が始まり、イスラエル統一王国初代の王ダビデが首都を置いた場所だとされている。

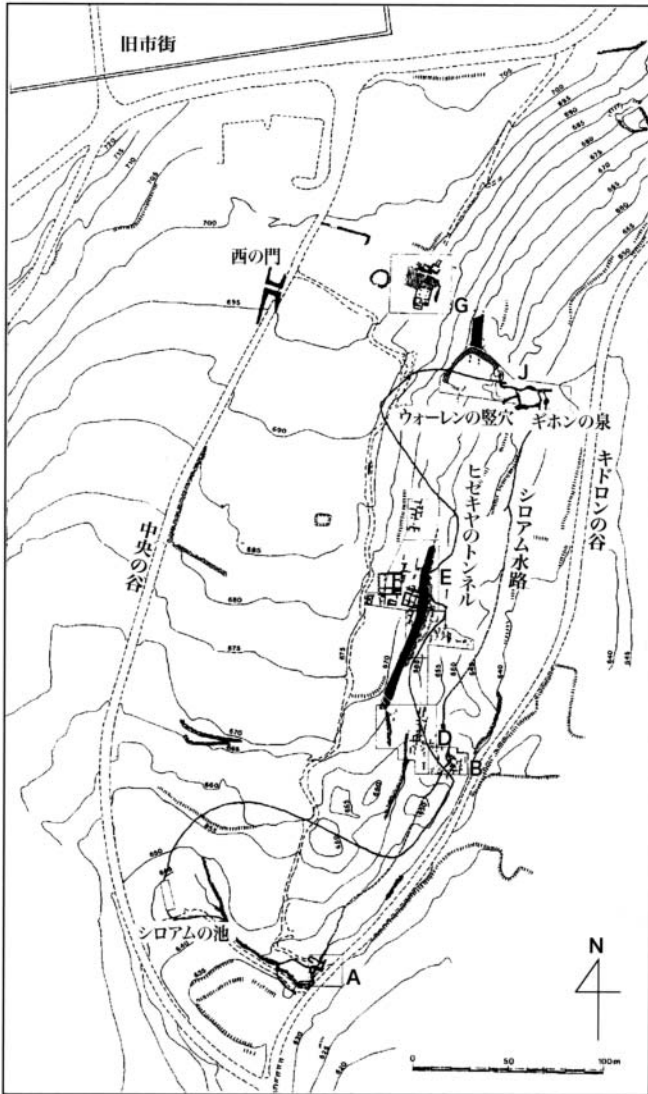
古代のエルサレムは現在の町によって完全に覆われており、政治的問題や土地所有の複雑さから大規模な発掘調査を行うことが難しい。これまでかなりの数の発掘調査が行われてきたが<sup>4)</sup>、調査が細かく分断されていたため、青銅器時代や鉄器時代のエルサレム像には不明な点が多かった。しかし、エルサレム建都 3000 年記念に向けて 1990 年

代から観光整備が行われ、特に「ダビデの町」で組織的な発掘調査が行われたことで、イスラエル王国時代の首都の様子が解明されてきた。また、別の組織による発掘調査で「ダビデの王宮」と考えられる建築も発見されている。これらの成果は、今後ダビデ王朝やイスラエル王国の歴史を理解する上で大きな意味を持つものである。

## 1. 「ダビデの王宮」らしい建物の発掘

ダビデはイスラエル 12 部族を統一し、エルサレムを中心に南レヴァントに強力な王国を築いた王として聖書に記されている(IIサムエル記 8 章)。ところが、1990 年代になると、聖書学の分野でも考古学の分野でもダビデの実在性や強力さを疑問視する主張がなされるようになった。聖書学では、俗に「ミニマリスト」と呼ばれる学者たちによって、旧約聖書はすべてバビロニア捕囚以降に創作されたもので、それ以前に関する記述には一切歴史的価値は認められないと主張されるようになった<sup>5)</sup>。考古学でも、ダビデの首都があったはずのエルサレムでほとんど大型建築が知られていないことから、同様な主張をする者が出てきた<sup>6)</sup>。当然このことはイスラエル王国の歴史を考える上で決定的に重要な事なので、1998～2001 年には聖書文学会が「聖書と考古学におけるエルサレムに関する協議会」<sup>7)</sup>を計画し、その成果は A. G. Vaughn and A. Killebrew, *Jerusalem in the Bible and Archaeology: The First Temple Period*, Brill, 2003 として出版された<sup>8)</sup>。しかし、この書は両論併記で、明確な方向性を出すことができないでいた。

このような状況を一変させたのが、E. マザール(Mazar)による「ダビデの王宮」らしい建物の発見である。マザールは、ダビデの町の一番高い部分の東側(G地区)で 2005 年から発掘調査を開始した(地図 1、写真 1)。ここにはこれまでも高さ 10m 以上ある石垣状の「階段状遺構」(前 12～11 世紀)が知られており、ダビデが攻め



地図1 ダビデの町と発掘調査区 (14～10層)  
Geva 2000: 2 を改変

落とす前にエルサレムに住んでいたエブス人の「シオンの砦」を支える石垣だったと一般に考えられてきた。この石垣の上部は、すでに1920年代にマカリストー (R.A.S. Macalister) によって調査され、目立った遺構が見つからないので放置されてきた場所だった。ところがマザールが再調査をしたところ、マカリストーが掘り残した部分から「ダビデの王宮」と思われる大型の建物が検出されたのである。

この建物は幅3mの壁で囲まれており、東西方向の壁は調査区の端から端まで30mにわたって貫通していた (図1)。今後調査区を広げるとさらに長い壁になるものと思われる。また、南北方向にも同じような壁が少なくとも7m以上続いていることが確認されている。これらの壁と関連して、入口と思われる部分、敷石の床、塔、小部屋等も検出されている。相伴する土器からこの建物は前10世紀、すなわちダビデ時代のものと考えられ、漆喰で覆われた床下からは前12～11世紀の土器が出土している。

発掘者のマザールは、この建物が「ダビデの王宮」だったと主張している。建物の規模から大型の公共建造物であることが確実であり、ダビデの町の一番高い部分、石垣の上に位置していること、時代が前10世紀であること等が理由である。また、イスラエルの王宮建築に特徴的な原アイオリス式柱頭がこの周辺からすでに発見されていたことや王室の役人の封泥が多数出土していたことも、この地区と王室との深い関係を示している<sup>9)</sup>。

もしこれが本当に「ダビデの王宮」だとすると、イスラエル史理解のために大きな意味を持つため、この同定には慎重な学者も当然いる。その点はマザールも認識しており、2005年の調査の初期報告はすみやかに刊行され (Mazar 2007)、2006年から2007年にも半年間連続的に発掘調査が行われた。この建物が他の機能をもった建物である可能性は捨てきれないものの、現時点でも前10世紀の「ダビデの町」にこのような大型の公共建造物が存在したことは確実であり、強力な首都の存在を示すものとなっている。

## 2. 防御・水利施設の発掘

ダビデ時代のエルサレムが頑強な要塞都市だったことは、最近の別の調査からもあきらかになっている。1995年からイスラエル考古局のR. ライヒ (Reich) とE. シュクロン (Shukron) が、エルサレム建都3000年記念のためにエルサレムの水源であるギホンの泉周辺の発掘調査を行い、強力な水利施設と防御施設を発見したからである (Reich and Shukron 1999)。

これまでの理解では、エルサレムの水は、城壁の外にあるギホンの泉の水を地下トンネルを使って城壁の内側に導き、「ウォーレンの堅穴」<sup>10)</sup> と呼ばれる自然の岩の亀裂か



写真1 東側から見たダビデの町

- ①ダビデの王宮? ②階段状遺構 ③水利施設への入口  
④城壁 (中期青銅器時代、鉄器時代Ⅱ期) ⑤ギホンの泉

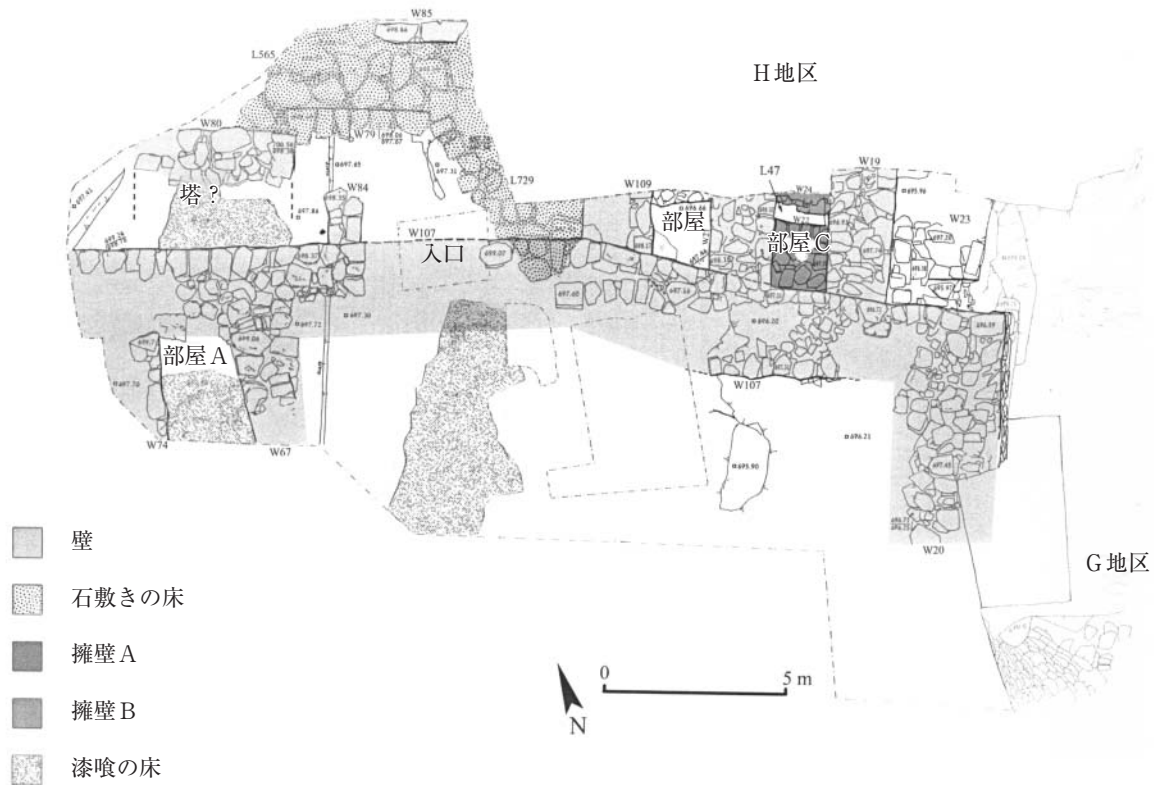


図1 「ダビデの王宮」プラン  
Mazar 2007: 54 より

ら汲み上げたと考えられていた。包囲戦に備えるためである。ところが今回の調査で、この水利施設はより大がかりで、地下トンネルの終点は自然の岩の亀裂ではなく、人工的に作られた大型の水溜だったことが判明した（図2）。この水溜の横には、ひとつの壁の幅が3mある塔が立っていたことも確認された（写真2）。1つ1つの石は長さ1mを越すような巨石が使われている。城壁の内側から地下トンネルに入った人は、この塔と水溜の上に出、そこから水を汲むようになっていたと考えられる。また、水源の泉自体の周囲も大型の塔で囲まれていた。こちらはさらに太い幅4mの壁でできており、建築の規模は15×17mであった。

これら一連の施設は、土器や建築様式から判断してダビデより6～700年前の中期青銅器時代に造られたものだと考えられるが、発掘者たちはダビデ時代まで継続使用されていたと主張している<sup>11)</sup>。これらが前8世紀の土器を含む土で覆われていたため、それまで地表に出ていたと考えられるからである。この塔の上部ではすでに中期青銅器時代の城壁がK. ケニヨンによって検出されており、今回の水利施設と一体の構造になっていた。さらに南側のE地区（地図1）でも、それに続く城壁が80mにわたってY. シロ（Shilo）によって確認されている（Shilo 1984）。これ

らはダビデが建設したものではないが、ダビデ時代（前10世紀前半）にもその首都エルサレムを守る巨大な防御施設として機能していたことが知られるのである。

これまで南レヴァント考古学では、中期青銅器時代には強力な城塞都市が形成されたが、後期青銅器時代になると一般に城壁は用いられなくなったとされてきた<sup>12)</sup>。この地域がエジプトの支配下にはいり、城壁の使用が認められなくなったからである。しかし、最近の研究では、これまで後期青銅器時代の城壁がないとされてきたエリコ（Jericho）やヘブロン（Hebron）でも中期青銅器時代の城壁が継続使用されていたことが示されており（Chadwick 2005; Peleg and Eisenstadt 2004）、このエルサレムの例も同じ傾向を示すものと言える。実際このように巨大な塔や城壁は破壊するのも困難で、町に居住がある限り上部構造を建て直して継続使用したと考えるほうがはるかに論理的だと思われる。

これまでダビデ時代のエルサレムの様子は考古学的にほとんど知られておらず、上述のようにその存在さえ疑問視する研究者もいたが、ここ10年間に「ダビデの町」で行われた考古学調査によって統一王国時代のエルサレム理解は飛躍的に進み、そのように極端な立場は不可能になったと言えよう<sup>13)</sup>。もはや情報が無いとしてイデオロギー的な

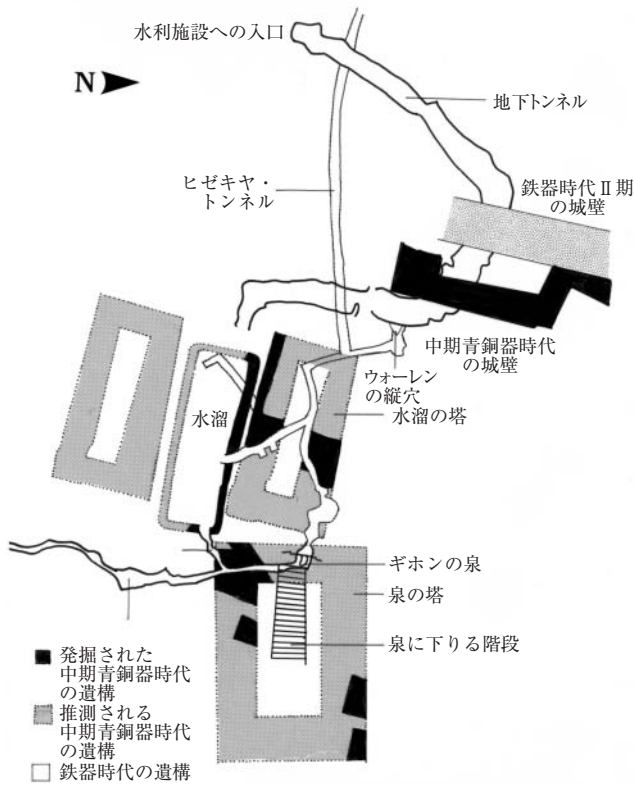


図2 ダビデの町の水利施設模式図  
Reich and Shukron 1999: 31 を改変



写真2 水溜の塔



写真3 ローマ時代のシロアムの池

議論が交わされるだけでは不十分で、これらのデータを説明できる考古学的モデルを構築することが求められるようになったのである。

### キリスト教関連遺跡の調査

#### 1. ローマ時代の「シロアムの池」の発掘

ここ10年間に大きな進展のあったもうひとつの分野は、キリスト教関連遺跡の調査である。たとえば、「ダビデの町」の南端では2004年にローマ時代のシロアムの池が発見され、調査が進んでいる(地図1)。

シロアムの池は、イエス・キリストが生まれつきの盲人を癒した場所(「ヨハネの福音書」9:1-7)として有名である。また、前述の中期青銅器時代の防御施設を最終的に作り変えたヒゼキヤ王(前8世紀末～前7世紀初頭)が、ギホンの泉から新たに地下水路(ヒゼキヤ・トンネル)を掘った最終地点としても知られており、これまでも観光客はこの水路を歩いて小さな池まで行くことができた。しかし、今回の調査でこれまで存在した池はビザンツ時代のシロアムの池で、イエス時代(やおそらくそれ以前)のシロアムの池はそのさらに南側にあったことがわかったのである。

この池は排水パイプの工事中に偶然見つかったものであるが、その後すぐにギホンの泉周辺の調査をしていた

考古局のライヒが緊急発掘を開始し、現在も調査は継続している。調査は土地所有の関係で池の東半分に限定されているが、長辺75mの矩形の人口池であったことが判明した(写真3)。短辺の長さは、西半分が調査されていないので確定できないが、隅の角度から池は若干台形になっていたと思われる。池の周囲は5段ずつ3段階に上るようになっており、水面の高さによって池の大きさを変えることができたようだ。

この池には二時期あり、第一期のものは漆喰張りで作られ、第二期のものは石造りの階段になっていた。第二期の石の下にある漆喰からはアレキサンドロス・ヤンナイオスの硬貨ばかりが出土した。ヤンナイオスは、セレウコス朝から独立を勝ち取ったハスモン王朝最後の王(前103～76年)で、その後南レヴァントは混乱期に入り、前37年ヘロデが王位についた。このため、この池の第二段階はハスモン王朝末期からヘロデ治世の初期に作られたものと思われる。また隅の角にあった広場からは、紀元70年に第

二神殿が崩壊し、ユダヤ人が離散する直前の第一次ユダヤ反乱期の硬貨が出土した。ユダヤ反乱最後の年「第 4 年」のものも含まれていたため、この池はエルサレム陥落時まで使用されていたと思われる。

その後この池は土砂に埋もれ、その存在さえ忘れられてしまったと考えられる。ビザンツ時代（紀元 4 世紀）にキリスト者たちが「聖地」に教会を建てられるようになった時、ヒゼキヤ・トンネルの終点をシロアムの池の場所と判断し、池を作り直してその上に教会を建てているからである。しかし、イエス時代（紀元 1 世紀）に使われていた池が、今回発見されたものであることは確実である。

この池の発見に伴い、シロアムの池周辺の調査が行われ、これら 2 つの池（ローマ時代、ビザンツ時代）とエルサレム神殿があった北側の丘（現在「黄金のドーム」がある「神殿の丘」）を結んでいたローマ時代の道路も発見されることとなった。この道路は「神殿の丘」に向かって階段状に上っていた。このような道路はこれまでも「神殿の丘」の近くで一部知られていたが、今回の発見で新約聖書時代（紀元 1 世紀）に「ダビデの町」と「神殿の丘」がどのようにつながっていたのかが復元できるようになった。その後、2007 年になってこの道路にそって排水路も検出されている<sup>14)</sup>。

現在もこれらの道路や排水路の調査は継続されており、「神殿の丘」と「ダビデの町」をつなぐ古代の道路を復元することが計画されている。そうすると、神殿の丘の近くからシロアムの池まで歩いてきて癒しを体験した盲人と同じ経路を観光客や順礼者も追体験できるようになる。紀元 1 世紀のエルサレムは、ユダヤ人にとっても第二神殿を失う直前の重要な時期であり、その様子を復元することには意味があるが、このようにキリスト教的色彩の強い遺跡の調査・復元にイスラエル政府考古局が積極的に関わることは、これまであまり例がなかったことであろう。

## 2. メギドの礼拝堂の発掘

キリスト教関連遺跡の調査でもう一つ注目に値する成果は、メギドの礼拝堂の発掘である。この礼拝堂は、コンスタンティヌス帝がキリスト教を公認する（紀元 313 年）前の建物と考えられ（紀元 3 世紀）、まだ迫害下にあった「地下教会時代」のキリスト者たちがどのような信仰を持ち、教会を形成していたかを知る資料として非常に興味深い。

この礼拝堂遺構は、イスラエル北部エズレルの谷にある青銅器時代、鉄器時代の遺跡で名高いテル・メギド（Tel Megiddo）の南西に位置していた。刑務所の拡張工事をするため事前調査を行ったところ、この遺構が中庭から発見され、2003～2005 年までイスラエル政府考古局によって

調査が行われたのである。現在は調査も終了し、報告書も出版された（Tepper and di Segni 2006）が、刑務所という立地もあり、一般公開は検討中である。

現地はアラビア語でアル・ラジュン（ヘブライ語ではオトナイ）と呼ばれており、ラテン語のレギオ（「軍団」の意）から来ていると考えられる。周辺からはローマ軍関係の遺物が以前から知られており、文献資料からもここにローマ第二軍団アライアナと第六軍団フェラッタの本営があったことが記録されていた。今回検出された建物もローマ軍の宿営の一部と考えられる。

礼拝堂のあった建物は、この地区で最も高くなった部分（Q 地区）に位置しており、20 × 30m の規模だった。建物は廊下を中心に 4 つの部分に分けられていた（図 3）。東側部分は、他の部分より床が 50cm ほど低くなっており、4～6 の部屋とパン焼き窯が検出された。北側部分と南側部分にも複数の部屋があり、居住空間だったようだが、残存状況はよくない。礼拝堂は西側部分で検出され、5 × 10m の大きな広間となっていた。入口は東側で、床にはモザイク装飾が施され、部屋の両側に天井のアーチを支える土台が据えられていた。また、このアーチの真下には 2 つの四角い石が床に埋められていた。周囲のモザイク装飾の配置から考えて、これは聖餐台の基礎だと思われる。

モザイク装飾は聖餐台の四方に施されており、東側と西側のものは比較的小型で幾何学模様になっていた。しかし、北側のものの中央には初期キリスト教徒の象徴であった魚が 2 匹メダリオンの中に描かれており<sup>15)</sup>、さらにその北側に白黒のテッセラで奉献碑文が記されていた（写真 4）。日本語訳すると、「ポルピュリオス（とも呼ばれる）ガイアヌス、百人隊長、私たちの兄弟が、贈り物として自分で経費を負担してこれ（モザイク）を敷いた。プロウチウスが、この作業を行った」となる。このように信仰を告白し、共同体に貢献するローマ将校がいたことは、『新約聖書』「ルカの福音書」7 章 5 節や「使徒の働き」10 章 2 節などにも例を見ることができるが、キリスト教禁制下でこのような行為が行われたことは驚きである。また、ここにすでに会衆が存在したことは、「私たちの兄弟」という表現から理解される。さらに南側のモザイクにも 2 つの奉献碑文が記されており、アケプトゥスという人物と 4 人の女性のことが記憶されている。これらの碑文と遺構は、当時のキリスト者共同体の性格や組織を研究する上で貴重な資料となるであろう。

この建物の使用時期は、土器、硬貨、碑文の書体から発掘者によって 3 世紀初めから末までとされている。4 世紀の初めにキリスト教が公認されると「聖地」イスラエルにはエルサレムの聖墳墓教会、ベツレヘムの聖誕教会など多くの大教会が建築されることになるが、それ以前の教会は

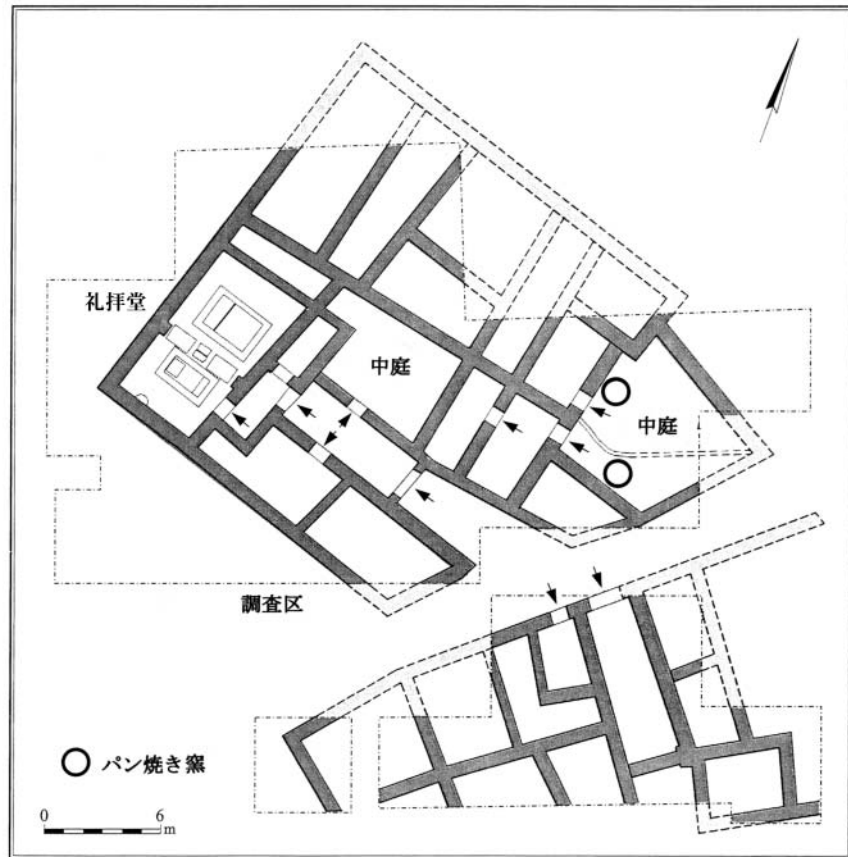


図3 メギドの礼拝堂プラン  
Tepper and di Segni 2006: 21 より

目立った建物を建てることができず、考古学的にも確認することがむずかしい。けれども今回発見された例は、その中でも比較的落ち着いていた時期には、キリスト者たちが確立した組織を持ち、聖餐式などの儀式を行い、礼拝行為専用の建物を建てていたことを示している<sup>16)</sup>。また、これまで知られていたドゥラ・ユーロポスやカベルナウムの初期教会堂遺構と異なり、この建物は軍隊という公の組織の中にあっただ点も注目し得る。

これまでイスラエルでは、フランシスコ会などの教会組織がキリスト教関係遺跡の調査を行うことはあったが、イスラエル政府考古局がこのように積極的にキリスト教関連の遺跡やローマ・ビザンツ時代の遺跡調査に取り組むようになったことは新しい傾向だと言えるであろう。この他にもシロヤヤティルの教会堂遺跡の調査、デカポリス都市ヒッポスの発掘なども行われており、同時代の考古学に対する関心が高まってきている (Eshel et al. 2001; Segal et al. 2006)。

ローマ時代以降の南レヴァントに関しては大量の文書・碑文資料が存在するため、これまで考古学的には軽視されることが多かった。しかし、プロセス考古学以降、考古学

が歴史学とは異なった視点を持つ独立した学問として確立されたため、イスラエルでもこのような調査がなされるようになったものと思われる。また、1948年のイスラエル国建国当初、考古学はユダヤ人とこの地域の結びつきを確認するため民族主義的視点から行われることが多く、キリスト教やイスラーム教関係の遺跡は軽視されることが多かった。しかし、本論で紹介したようなキリスト教関係遺跡の調査は、現在のイスラエル考古学がそのようなイデオロギーから解放されつつあり、方法論的により成熟したものになっていることを示すものであろう。

註

- 1) ハツォルは Y. ヤディン (Yadin) の指揮で 1955～69 年に発掘され、この調査の参加者からその後多くのイスラエル人考古学者が生まれた。マサダもヤディンのもとで 1963～65 年に多数のヴォランティアを動員して発掘され、ほぼ全体像があきらかにされた。
- 2) 例えば、アメリカは William F. Albright Institute for Archaeological Research, フランスは Ecole Biblique et Archéologique Française de Jérusalem, ドイツは Deutsches Evangelisches Institut für Altertumswissenschaft des Heiligen Landes.

- 3) 1990 年から 2004 年まで日本聖書考古学発掘調査団がエン・ゲヴ遺跡の調査を行った。また、現在も立教大学、天理大学、同志社大学、慶應義塾大学等によってテル・レヘシュ遺跡の調査が継続されている。
- 4) 1990 年代以前の調査に関しては、Geva 2000 参照。
- 5) 「ミニマリスト」でないほとんどの聖書学者は、旧約聖書が最終的に編集されたのは捕囚期後だとしながらも、それらは完全な創作ではなく、それ以前からの文書記録や口伝伝承に基づいて記されたと考えている。
- 6) たとえば、I. フィンケルシュタイン (Finkelstein) は、ダビデ・ソロモンの統一王国は貧弱で、実際にイスラエルが確立されたのは、北王国イスラエルが 100 年ほど後のアハブ王の時代 (前 9 世紀)、南王国ユダに至っては北王国が滅びた後の前 7 世紀以降のこととした。この主張のため、フィンケルシュタインは南レヴァント全体の土器編年を約 80 年引き下げ、これまでソロモン時代とされてきた統一規格の大型城門などを伴う層をすべてアハブ時代とした。これには批判が多い (註 8 の新刊紹介参照)。
- 7) 英語名は、Consultation on Jerusalem in Bible and Archaeology.
- 8) 筆者による新刊紹介 (杉本 2005) も参照。
- 9) 今回の調査でも「シヨビの子シェレミヤの子イエフカル」の封泥が見つかっている。イエフカルは、エレミヤ 37:3 によると、ゼデキヤ王から預言者エレミヤに遣わされた使者だった。
- 10) イギリス人の軍人であった C. ウォーレン (Warren) が発見したことから、このように呼ばれる。
- 11) 後期青銅器時代のエルサレムに居住があったことは、これまでもアマルナ書簡の一部がエルサレムから送られていることや同時代の墓がダビデの町に對面するオリブ山の中腹で検出されていることから知られていた (Saller 1964)。また、前述の「階段状遺構」は一般に鉄器時代 I 期 (前 12 ~ 11 世紀) に年代づけられるので、中期青銅器時代からダビデ時代 (前 10 世紀) までエルサレムが継続していたことは確実である。
- 12) たとえば、マザール 2003: 155 参照。
- 13) ダビデを創始者とする王家の存在を否定することは、すでにダン遺跡から「ダビデの家」碑文が出土して以来困難になっていた。
- 14) イスラエル政府考古局のホーム・ページにおける発表 “In excavations the Israel Antiquities Authority is conducting in the City of David the city’s main drainage channel was discovered (September 10, 2007)” 参照。
- 15) 十字架がキリスト教の象徴として確認されるのは紀元 5 世紀以降で、それ以前は魚や錨が用いられることが多かった。「イエス・キリスト、神の子、救い主」(Ιησους Χριστος Θεου Υιος Σωτηριος) という信仰告白の頭文字を並べると、Ιχθυσ (「魚」

の意味) となるからである。

- 16) 実際エウセビウスは、すでに 2 世紀には「すべての町に大きな教会堂があった」ことを記している (Eusebius of Caesarea 1957)。

#### 参考文献

- Chadwick, J. R. 2005 Discovering Hebron. *Biblical Archaeology Review* 31-6, 24-33, 70-71.
- Eshel, H., Magness and E. Shenhav 2001 Surprises at Yattir: Unexpected Evidence of Early Christianity. *Biblical Archaeology Review* 27-4, 32-43.
- Geva, H. 2000 *Ancient Jerusalem Revealed*. Israel Exploration Society.
- Israel Antiquities Authority 2007 In excavations the Israel Antiquities Authority is conducting in the City of David the city's main drainage channel was discovered (September 10, 2007), [http://antiquities.org.il/article\\_item\\_eng.asp?sec\\_id=25&subj\\_id=240](http://antiquities.org.il/article_item_eng.asp?sec_id=25&subj_id=240).
- Mazar, E. 2007 *Preliminary Report on the City of David Excavations 2005 at the Visitor Center Area*. Shalem Press. (ヘブライ語)
- Eusebius of Caesarea (J.E.L. Oulton (trans.) 1957 *The Ecclesiastical History*. Book III.1. 5.
- Reich, R. and E. Shukron 1999 Light at the End of the Tunnel. *Biblical Archaeology Review* 25-1, 22-32, 72-73.
- Saller, S. J. 1964 *The Excavations at Dominus Flevit (Mount Olivet, Jerusalem), Part II. The Jebusite Burial Place*. The Franciscan Press.
- Segal, A. and M. Eisenberg 2006 The Spade Hits Sussita. *Biblical Archaeology Review* 32-3, 40-51, 78.
- Shanks, H. 2005 The Siloam Pool Where Jesus Cured the Blind Man. *Biblical Archaeology Review* 31-5: 16-33.
- Shiloh, Y. 1984 *Excavations at the City of David, Vol I, 1978-1982: Interim Report of the First Five Seasons*. Qedem 19. Hebrew University of Jerusalem.
- Tepper, Y. and L. di Segni 2006 *A Christian Prayer Hall of the Third Century C.E. at Kefar Othnay (Legio)*. Israel Antiquities Authority.
- Peleg, Y. and I. Eisenstadt 2004 A Late Bronze Age Tomb at Hebron (Tell Rumeideh). In H. Himzi and A. DeGroot (eds.), *Burial Caves and Sites in Judea and Samaria for the Bronze and Iron Age*. Israel Antiquities Authority, 231-259.
- 杉本智俊 2005 「新刊紹介 A.G. Vaughn and A.E. Killebrew (eds.), *Jerusalem in Bible and Archaeology: The First Temple Period*, xiii + 510pp., Leiden: Brill Academic Publishers, 2003, US \$ 123.00.」『オリエント』48 巻 1 号 251-255 頁。
- マザール A. 2003 『聖書の世界の考古学』(杉本智俊・牧野久実訳) リトン。

杉本 智俊

慶應義塾大学

David T. SUGIMOTO

Keio University